



Title	賀川豊彦とスウェーデン・デンマーク：戦間期の北 欧をみた日本人
Author(s)	齊藤, 弥生
Citation	IDUN -北欧研究-. 2019, 23, p. 225-236
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71784
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

賀川豊彦とスウェーデン・デンマーク

戦間期の北欧をみた日本人

齊藤 弥生

1. 戦間期のスウェーデン・デンマークをみた日本人

アメリカ人ジャーナリストの M.W.チャイルズ (Marquis W. Childs) が 1936 年 (昭和 11 年) に出版した *Sweden: The Middle Way* は、多くの国が学ぶべきユートピアとして、スウェーデンのイメージを世界各国に定着させるきっかけとなった。「この世のユートピア」というスウェーデンのイメージがいかに強かったかは、岡沢 (1991, 2009) にも記されている。世界大恐慌を受けて、アメリカが公共事業による雇用政策であるニューディール政策を遂行するなかで、チャイルズは国家による経済介入が自由主義の脅威でないことを示すために、スウェーデンの経験を参考事例として紹介したといわれる。

Sweden: The Middle Way を日本語に翻訳し、1938 年 (昭和 13 年) に『中庸を行くスウェーデン—世界の模範国』(写真 1) として出版したのが、賀川豊彦 (1888-1960) と同志社大学名誉教授の島田啓一郎 (1910-2003) であった。「この書の翻譯は専ら島田啓一郎氏の努力によつたものである。私はたゞこれを原書と照し合わせて處々筆を入れたにしか過ぎない」と、賀川豊彦は「譯者序」の中で、当時 28 歳だった島田の刊行に至る大きな貢献を述べている。賀川は 1924 年 (大正 13 年) に欧米各国に巡礼に出かけ、1936 年 (昭和 11 年) には再度、欧米に出かけている。第 1 回目の巡礼先はアメリカ、イギリス、フランス、ロシア、オランダ、ドイツ、デンマーク、イタリア、その 12 年後に実施した第 2 回目の巡礼では、訪問先は 17 カ国を超え、北欧諸国ではスウェーデン、ノルウェー、フィンランドを訪問している。この頃は、日本では大正デモクラシーの時代が幕を閉じ、治安維持法 (1925 年)、満州事変 (1931 年)、五・一五事件 (1932 年)、二・二六事件 (1936 年)、日中戦争 (1937 年) というように、言論の自由が制限され、戦争の時代に突き進んでいく時代であった。この時代に北欧諸国を訪れた賀川は何を見て、何を感じたのだろうか。



(写真1)『中庸を行くスウェーデン』表紙

また賀川の欧州訪問の時期はスウェーデン政治史からみても興味深い。1920年にスウェーデンでは第一次ヤルマル・ブランティング内閣が誕生し、7か月ではあったが、社会民主党が初めて単独政権を樹立した。また1932年に誕生したペール・アルビン・ハンソン内閣は、1976年までの44年間、スウェーデンにおいて社会民主党による長期政権を築く土台を築いた。ハンソン首相は、スウェーデンモデルの理念的基盤となった国家ビジョンである「国民の家」(1928)を提唱した人物である。まさにスウェーデン社会民主党による、「国民の家」ビジョンに基づく社会政策が始まろうとしていた時期であった。当時、ハンソン内閣の課題は二つあり、一つは社会主義への不安や恐怖を解消して国民に対し社会民主党の政権担当能力を示すこと、また世界恐慌による大量の失業者への対応であった(岡沢1991)。

2. 賀川豊彦という人

賀川豊彦とはどのような人物であったのか。小林正弥(2011)の表現を引用すると「キリスト教説教師として伝道活動を活発に行うと同時に、社会活動家であり、日本の貧民救済運動、労働運動、農民運動に大きな役割を果たし、協同組合運動を創始し、平和運動にも大きな貢献を果たした」人であるが、その活動は広範囲で多岐にわたっており、数行でまとめるのはかなり難しい。

隅谷(2011)により、賀川豊彦を紹介すると次のようになる。賀川は1888年に兵庫に生まれるが、複雑な家庭環境の中で育ち、また13歳で肺結核を患うなど、苦悩の多い青少年期を過ごした。キリスト教の宣教師との出会いをきっかけに牧師を目指す。神学校に進学後、肺結核が進行し、余命2年の宣告を受ける。神学校に通う道中に葺合新川(現在の神戸市中央区の一地域)の貧民窟があったが、賀川は残り短い人生をここに住み、ここに住む人々の救済に尽力しようと決意する。ロンドンのイースト・エンドに住みながら、貧しい人たちの救済にあたったアーノルド・トインビーやキャノン・バーネットの活動にみられる、セツルメントの日本での実践である。セツルメントとは、知識人の有志がスラム街に住み込んで、住民の生活改善のために、地域の環境整備などに取り組む活動である。

しかし賀川の活動はセツルメント活動に終わらなかった。賀川は自分だけがいくら努力しても、貧困問題を解決できないことに気づき、さらに学びを重ねるために1914年にアメリカに留学する。アメリカ生活の中で、賀川はニューヨークのスラム街を訪ね、労働者によるデモに出会い、「労働者自らの力で自ら救ふより外に道はない」と、労働者自身が動かなければ何も実現しないことを肌で感じとった。隅谷(2011)は、賀川が帰国一年後に書いた「日本における防貧策としての労働組合運動」にみる賀川の考え方を次のように引用している。「もし今日、貧民階級

をなくしてしまふと思へば、今日の慈善主義では不可能である。慈善主義は常に貧民を増加さす傾向がある」とし、「救済思想の徹底はどうしても、労働問題の根底に突き衝らねばならぬと思ふ。それには、社会主義、社会改良主義、国家社会主義と云った様な各種の主義、主張もあるが、日本の今日の現状に照らして、労働組合の健全なる発達をなさしめるより急務なるはないと考へる」(賀川豊彦『精神運動と社会運動』)。

また安価な生活必需品が手に入るよう、賀川は1919年に大阪購買組合共益社、1920年には神戸購買組合(現在の「コープこうべ」)を設立した。また農村の貧困問題にも目を向け、1922年には神戸で農民組合を結成し、また誰でも医療が受けられるようにと最初の医療生活協同組合といえる新宿診療所(現在の東京中野組合病院)を設立し、協同組合運動を展開する。賀川の農村振興はデンマークの国民高等学校とその精神から多くを学んでおり、これは吉武(2003)に詳しい。

3. 賀川がみたデンマークー 豊かな農村社会を支える精神と文化

3.1. デンマークの国民高等学校と賀川らによる日本農民福音学校

イエスの友の会機関紙『雲の柱』第13巻第12号(1934)の裏表紙には「第九回日本農民福音学校生徒募集」の広告が掲載されている。「趣旨 日本農村の精神的、経済的更生のために基督精神による訓練と経営技術を與ふるを目的とす。此の為に特にデンマークの復興の指導者グルンドウィツヒ等の精神に倣ひ、特に人格的村塾的教育を施す」とあり、賀川はデンマークの国民高等学校(folkehøjskole)を日本の地で実現しようと尽力していたことがわかる。

デンマークを中心に、北欧諸国の国民高等学校は日本でも紹介されている。国民高等学校は、N.S.F.グロントヴィ(Nikolaj Frederik Severin Grundtvig)(1783-1872)が構想し、その弟子となるグロントヴィ派(Grundtvigianism)の人々が設立した、スカンジナビア諸国に見る特有の教育施設である。国民高等学校は一般に、義務教育を終了した人は、性別、年齢、国籍などに関わりなく、誰でも入学することができ、資格や試験とは無縁のユニークな学校である。

この広告によれば、賀川らの日本農民福音学校が開催された場所は兵庫県で、主要科目は聖書講義、農村経営、産業組合論から、農繁期託児所まで、農村で暮らす人々に必要な科目が20科目用意されていた。校長は農民運動家で牧師の杉山元治郎(1885-1964)で、賀川は専任講師を務めている。募集定員は20名、資格は「農村に住居し農業に従事せる十八歳以上の青年にして宗教的教養を欲するもの」で、授業料は無料で食費と旅費は自己負担となっており、開講期間は約1か月である。日本農民福音学校は農閑期の合宿研修として全国に広がっていった。

3.2. 初めてのデンマーク

賀川は1924年の第1回めの欧米巡礼の旅で、デンマークの国民高等学校と衛生的な農村生活の豊かさに感銘を受け、その様子を著書『雲水遍路』に「デンマークの印象」として数ページにわたり記している。「私は遂にデンマークに」というあたりは、デンマークという国が賀川にとっていかに興味深い国であったかがうかがえる。この時、賀川はコペンハーゲンを起点に、ハスラウ、フエレウイン、アスコー(Askov)の国民高等学校を巡り、その後、ハヂヤアンに立ち寄り、ドイツに移動している(賀川1964: 124-132)。

(前略) 私は遂にデンマークに来ました。そして私は、一昨日よりハスラウを見、フエレウインを見、昨夜は前の文部大臣アプレル博士が自ら経営してゐる、アスコーの農民学校に泊めて貰ひました。日本に帰つてデンマークの真似をしようと思ひますけれども、逆も出来さうありません。第一国民全体の意気込が違ひます。デンマークは、自作農創定金に無利子のまゝ十五年据置で、一億五千万円の基金を以て、小作人に皆土地を持たして居ります。日本の様に、吝嗇臭い僅か三百七十万の家族の小作農民に、一年七百万円の自作農創定費を、出さうといふのと大分違ひます。デンマークでは、村に生活する方が町に生活するよりか、生活に安定があります。それで少し窮屈な田舎の生活に、辛抱できる人間は、喜んで田舎を選びます。デンマークでは、最も貧乏な小作人でも平均三十エーカー位牧場を持つて居るようです(賀川1935: 129)。

賀川はデンマークの農村の豊かな生活に驚いた。賀川は、デンマークの豚小屋の方が自分の神戸の家より良い、とまで述べており、その驚きが伝わってくる。

(筆者加筆：ハスラウの国民高等学校の) 畜産室の奇麗なことに、私は驚いた。それは、私が長年住んでゐる神戸葺合新川の人間の住む二畳敷長屋より、数等衛生的なものであつた。私は、デンマークの豚は、日本の人間より善き境遇に居ると思ふて、デンマークの豚を羨んだ。これなればこそ、世界一のベーコン(豚肉の燻製)も出来るのだと、私は感心したことであつた(賀川1935: 126)。

3.3. 豊かな農村社会の根源にあるもの

賀川はデンマークの農村社会の豊かさの根源にあるものは、宗教だと繰り返し記している。しかしここでいう宗教は信仰というより、生活に根差した哲学のよ

うなものを意味しているように見える。賀川は「デンマークでは、隣同志協力することが宗教」、「すべてが宗教的であるというのではなく、宗教は国民の常識になっている」と述べており、「日本で云ふと、新井白石と二宮尊徳を一緒にしたような人物」(賀川 1964: 130) とグロントヴィを表現し、その功績を称賛している。

またグロントヴィと同時期に、デンマークにおいて宗教革新運動で活躍したヴィルヘルム・ベック (Vilhelm Beck) (1829-1901) について、「デンマークの外にあまり知れて居ない宗教であります、この国にとつては、英国に於けるブース大将以上の大事業をした人」として、彼の社会に対する貢献も讃えている。ブース大将とはウィリアム・ブース(William Booth)(1829-1912)のことで、世界最大の人道援助団体の一つである救世軍 (Salvation Army) の創設者である。

さて賀川が訪問したアスコーは、ユトランド半島南部のヴァイエン市 (Vejen commune) (人口約 9000 人) 郊外にある集落で、アスコー国民高等学校(Askov Højskole)は 1865 年に開校された歴史のある国民高等学校である。賀川はアスコー国民高等学校でヤコブ・アプエル Jacob Appel 校長(1906-1928)の歓迎を受け、ここで宿泊している。アプエル校長は国会議員 (左翼党) で文部大臣の経験もあった。ここでは『雲水遍路』に掲載された、賀川がアスコーから日本の友人にあてた手紙を引用する。

私は、デンマークの生活にこのウイリアム・ベックの感化を見脱すことは出来ないと思ひます。村の教会などでも、実に盛んです。それは、ほんとに羨ましい位です。

此の宗教無くしては、逆もデンマークの様なよい国を作ることは出来ませぬ。日本に於ける産業組合 (筆者注: 日本の協同組合の前身) の歴史も、もう新しいものではありません。しかし日本に、何故完全な産業組合が、出来ないのでしょうか。デンマークは完全なものを作つて居ります。日本であれば、百軒も小売店があらうと思はれる、ハスラウのような街でも、店はたつた一軒しかありません。そのたつた一軒の店は、消費組合の家です。

デンマークでは、隣同志協力することが、宗教になつて居ります。然し日本の農村では、それだけの訓練が出来て居りませぬ。私は此の点を随分重視する者です。

グルントウイツヒの感化も頗る大きなものに違ひありません。今日三十幾つかの農民学校が、彼の名を永久に記念する為めに建つて居ります。

勿論、グルントウイツヒ派と云つても、凡てが宗教的であると云うわけではありません。然し、デンマークでは、宗教は国民の常識になつて居ります(賀川 1964: 130)。

さらに賀川は知人にあてた手紙の中で、「私はデンマークに来たことを、心から喜んで居ります。(中略)私は思ひましたーヨーロッパを見ようと思へば大きな国を見てはならないと。ヨーロッパの小さい国ほど、よく治まってゐます」とも述べており、デンマーク訪問が賀川にとって貴重な機会であったことがわかる。そして、国民高等学校の日本での展開を強く決意している。

(中略) S 兄、農村を改良するには、矢張、グランドウイヒ流にやらなくちやいけないと思ひます。つまり私の云ふのは、土から生えねばならぬといふことです。私は、日本に於ても、ドイツやロシアの真似をしないで、デンマーク流に、農村に於ける精神的改造から、初めねばならないのではないかと思ひます。

(中略) グランドウイッヒの最初の学校は、生徒が僅か四人しかありませんでした。私はその四人から始めたいと思ひます(賀川 1964: 131-132)。

4. 賀川がみたスウェーデンー 庶民の生活を支える協同組合

賀川が「スウェーデンに学びたいことは、その發達せる協同組合に就きて」であった。『世界を私の家として』(1936)の中で、賀川は「スカンジナビヤ旅行印象後記」を記し、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドの好印象を述べ、1936年に賀川はストックホルムで設備の整った工場や住宅、住宅内に設置された託児所をみて次のように述べている。

周囲三里に近い大きな島全部に四大工場が立つてゐる。製粉、マカロニ、パン製造、人造バタ等であるが、この大工場に唯の二百五十人しか職工が居ないのに驚く。而も工場は米国ワシントンのホホワイト・ハウスより美しい。唯驚異であった。それより職工住宅を見る。室内装飾の美しいこと、教養の高いこと、家賃の高いこと、共に驚異である。(中略)更に八千戸を有する組合住宅を見る。託児場の美観に驚いた。スウェーデンなればこそと思はれた(賀川 1964: 438)

スウェーデンの豊かさの背景に、協同組合活動や連帯に基づく財源調達の様相があることを賀川は説明している。スウェーデンでは生命保険組合が基礎となり、他の組合は事業資金をこの生命保険組合からの融通を受けているとし、その結果、さまざまな事業に資金が行き届き、順調な成長を遂げていると、賀川はエッセイで述べている。賀川は政府の役割にはほとんど触れず、スウェーデンにおける民間の創意工夫に視点が注がれている点が興味深い。なぜなら、日本に於けるスウェーデン関連の社会研究では、スウェーデンの戦後福祉国家と諸政策に関わ

るものが多く、そのほとんどが政府の役割に注目しているからである。

日本であれば中央金庫の金を借りる譯であるが、これとても利息は約五朱で、決して安い利率の金では無い。生命保険から無利子に近い金が来るのであれば消費が順調に伸びていくことは困難である。(中略) スウェーデンではこれと反対に、生命保険金を持つて、自作農の創設に、信用組合、消費組合に加工工場などに廻してゐるので、いづれもが順調な発展をなしつゝある。またスウェーデンには優れた住宅組合がその資金の融通を受けて、經營せられて居ることも、附記しなければならぬ(賀川 1837: 35)。

そして「生活権と労働権と教育権が保障されれば、人は罪を犯さない」と賀川は断言する。賀川の代表作でもあり、映画化された『死線を越えて』(1920年)には、葺合新川の貧民窟での経験が生々しく描かれているが、スウェーデン社会のあり様は驚きであつたに違いない。

何を言つてもスウェーデンで最も驚くことは、犯罪率の非常に低いことである。刑務所に行く者は、一年間を通じて約千百人であり、(日本は十二萬六千人)殺人犯は十年間平均で約十一人くらゐだと記憶してゐる――一九三一年恐慌時には少し悪かつたが一そのためにストックホルムは刑務所を廢したと聞いてゐる。その筈である、妊娠に對しては妊娠保険組合があり、病氣に對しては養老年金制度があり、死亡に際しては生命保険組合があり、日用必需品は搾取なき消費組合から求め、住宅は搾取を離れたる住宅組合から借り、又世界一立派な生命保険組合が營利を離れて無産階級の生命保険を司つてゐる。それに被服は手工組合で織り、教育は中等程度まで義務制であり、それより上は學費の半額まで補助がある。(中略) かういふ國では盜棒をすると損をする。僅かばかりの金、五十圓か百圓の金を盗んで、國民としての何萬圓かの權利を失ふことが厭であるからである。實際國民といふものは、生活権と労働権と教育権を保證してくれるならば、そんなに罪を犯すものではない」(賀川 1837: 33)

賀川は北欧以外にも実に多くの国々を訪問している。『世界を私の家として』の「協同組合行脚」の章ではドイツやフランスを始めヨーロッパ諸国の協同組合の成功例、失敗例を紹介している。いつ戦争が起きても不思議でない時期に、多くの国に自ら赴き、記録を残していることから賀川の新しい社会ビジョンづくりへの熱意が伝わる。格差社会、貧困、社会的排除という社会的課題が深刻化する

現代の日本において、戦前に賀川がみた自律と連帯のデンマークとスウェーデン社会の描写は、21世紀に暮らす私たちにも興味深いものである。

5. スtockホルムにある賀川の足跡

『時代』(Tidevarvet)は1923年から1936年にかけて発刊された、フェミニズム系の政治誌である。同誌は5人の女性により始められ、創刊者の1人にはスウェーデンの女性解放運動で最も大きな影響を与えた作家の1人であるエーリン・ウェグナー(Elin Wägner)(1882-1949)が参加している。

『時代』1936年7月18日号に、「実生活におけるキリスト教の人類愛」という見出しで、写真入りで、賀川豊彦のスウェーデン来訪が伝えられている。記事は、日本からきたスウェーデンに強い関心を抱く平和主義者として賀川を紹介し、賀川がブラジエホルムにあるエマニュエル教会の集会で二晩にわたり、講話をしたことを伝えている。「過剰な人口、資源ニーズ、解決しなければならない債務問題、複雑な通商問題など、今日では戦争の要因がいくつも存在する。キリスト教による人類愛がリーダーシップをとり、戦争を引き起こす問題に打ち勝たなくては、戦争から逃れることはできない。もし私たちが国家間で協調的な貿易協力を有していたならば、国際的な連帯はもっと強固であっただろう。この小さいスウェーデンは小さい国であるが、たくさんの協同組合による購買店があり、強力な協同組合事業がある。それらはキリスト教的な協力とは呼ばれないだろうが、協力の象徴であり、すべての領域で実施されなくてはならない」と、賀川はエマニュエル教会での講話で語っている。

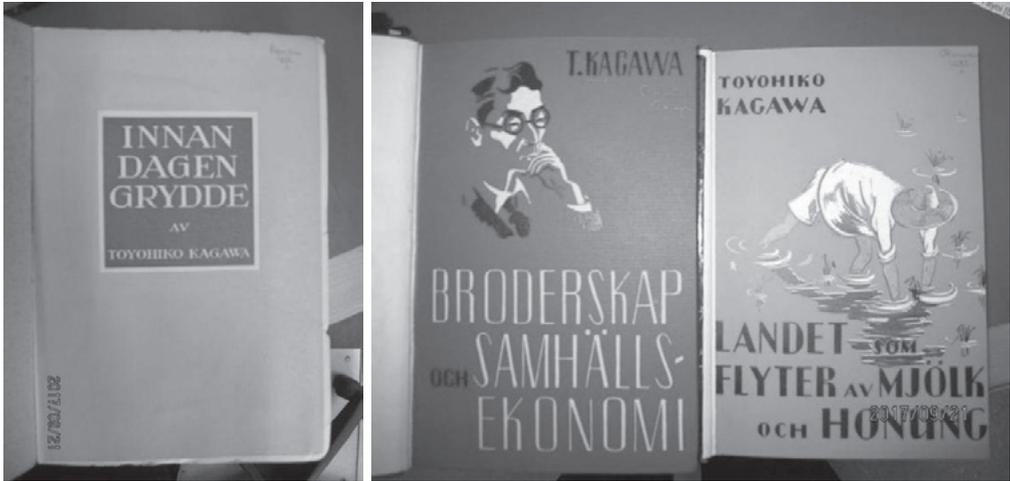
ブラジエホルムはストックホルム中心部の半島部分で、ノーベル賞受賞者が毎年、宿泊するグランドホテルある。ブラジエホルムにあったエマニュエル教会の建物は現存しないが、当時の絵を見ると、3階建てのオペラハウスのように大きく、美しい教会であった。現在は少し北のクングステン通り沿いにイマニュエル教会として、いくつかの教会が合併した形で残っている。



(写真2)現在のイマニュエル教会 外観



(写真3)現在のイマニュエル教会 祭壇



(写真4)『死線を越えて』(1925) (写真5)『友愛の政治経済学』(1938)と『乳と蜜の流るる郷』(1937)

王立図書館の検索サイト LIBRIS を使い、「賀川豊彦」で検索すると、48 件の賀川の著書が現れる。前述の『死線を越えて』(1920)は、1925年にすでにスウェーデン語に翻訳され、“*Innan Dagen Grydde*”というタイトルで刊行された(写真4)。“*Landet som flyter av mjölk och honung*”(写真5-右)は『乳と蜜の流るる郷』(1935)の翻訳であり、福島県の会津地方を舞台とする作品で協同組合をテーマとした作品であるが、1937年にはスウェーデン語で刊行されている。“*Broderskap samhällsekonomi*”(写真5-左)は1936年にニューヨークで英語により出版された“*Brotherhood economics*”のスウェーデン語訳で、17か国語に翻訳されているが、スウェーデンで1938年に刊行された。“*Brotherhood economics*”2009年に日本に逆輸入されて『友愛の政治経済学』として日本語で刊行された点も興味深い。スウェーデンに存在する賀川の著作の多くはキリスト教に関するものであるが、中にはスウェーデンの作家や宗教家が賀川自身やその家族について記したものもある。

6. 平和への願い

賀川は、1940年8月、反戦運動嫌疑で渋谷憲兵隊に拘引され、同年10月、賀川の個人雑誌とも言われる『雲の柱』は19巻をもって廃刊となった。ここで紹介した「近代國家の模範スウェーデン」が掲載されてから3年後のことであった。そして日本は太平洋戦争に進んでいった。賀川は『中庸を行くスウェーデン—世界の模範国』の「譯者序」を次のようにしめくくっている。

平和二百年、このスウェーデン國は地球の表面に於て最も理想に近い、社會的水

準を我々に示してみると考へざるを得ない。東洋平和の實現に努力してゐる日本は、大にスウェーデンに學ぶところがなくてはならぬ（チャイルズ 1938: 5）。

賀川は戦後5回にわたり、ノーベル賞候補者に推薦されている。初めは、スウェーデンの神学者でウップサーラ大学教授のクヌート・ベルンハルド・ヴェストマン（Knut B. Westman）（1881-1867）による1947年のノーベル文学賞への推薦で、『死線を越えて』『太陽を射るもの』『乳と蜜の流るる郷』『壁の声きくとき』『一粒の麦』『涙の二等分』という6冊の著作が挙げられた（賀川豊彦記念松沢資料館 2018: 75）。また翌年の1948年にも、スウェーデン人の地理学者であり、スウェーデン・アカデミーの会員であったスヴェン・アンデシュ・ヘディン（Sven Anders Hedin）（1865-1952）によって、賀川は再び、ノーベル文学賞に推薦された（*ibid.*）。さらに戦前のスラムでの救貧活動、その後の労働運動、協同組合運動、農民運動などの社会運動、海外に於ける伝道・講演活動、戦後は内閣参与として戦後復興に尽力したことなどの理由により、1954年から1956年の3年間にわたり、ノーベル平和賞の候補となった（*ibid.*）。

※本稿は、齊藤弥生「賀川豊彦とスウェーデン」岡澤憲芙監修・日瑞150年委員会編『日本・スウェーデン修好150周年記念』彩流社（2018年刊行）に「賀川がみたデンマーク」を加え、修正加筆をしたものである。

Toyohiko Kagawa as a Japanese who Saw Scandinavian Society before WWII

Yayoi Saito

Summary

Toyohiko Kagawa (1888–1960) was a Japanese Christian pacifist and labour activist. He is also known as one of the founders of Japanese cooperatives. He visited the USA and European countries to have speech and he saw democracy and welfare states in western countries interwar period. In this article, author wants to show that some Kagawa's works in Japan was inspired by the Swedish society and the Danish society. Two examples are written; one is that the idea of Japanese farmer evangelical school (*Nihon nomin fukuin gakko*) before WWII to improve life quality in rural area comes from the experience of folk high school (*folkskole*) in Denmark, and another one is that cooperatives worked well and helped people in Sweden.

参考文献

- チャイルズ, M.W.著, 賀川豊彦・島田啓一郎訳. 『中庸を行くスケーデン—世界の模範國』, 豊文書院, 1938年.
- 賀川豊彦. 『死線を越えて』改造社, 1920年.
- 賀川豊彦. 『雲の柱』第13巻第12号, 1934年.
- 賀川豊彦. 「近代國家の模範スケーデン」『雲の柱』第16巻, イエスの友の会, 1837年.
- 賀川豊彦. 「雲水遍路」「世界を私の家として」賀川豊彦全集刊行会『賀川豊彦全集』第23巻第23回配本, キリスト教新聞社, 1964年.
- 賀川豊彦記念松沢資料館監修. 『賀川豊彦: 「助け合いの社会」を目指した功績を知る』日本生活協同組合連合会, 2018年.
- 小林正弥. 「解説 愛の実践者・賀川豊彦の思想的意義—コミュニタリアニズムの観点から」隅谷三喜男『賀川豊彦』岩波書店, 2011年.
- 岡沢憲英. 『スウェーデンの挑戦』岩波新書, 1991年.
- 岡沢憲英. 『ストックホルム—ストーリー—福祉社会の源流を求めて』早稲田大学出版部, 2004年.

岡沢憲芙. 『スウェーデンの政治』東京大学出版会, 2009 年.

齊藤弥生. 「賀川豊彦とスウェーデン」『日本・スウェーデン修好 150 周年記念』
彩流社, 2018 年.

隅谷三喜男. 『賀川豊彦』岩波書店, 2011 年.

吉武信彦. 『日本人は北欧から何を学んだか—日本—北欧政治関係史入門』新評論,
2003 年.

TIDEVARVET 1936 年 7 月 18 日号